

教職大学院

Newsletter

No. 78

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2015.11.14

「絶えざる刷新を目指す」教師教育への期待

カリタス学園・理事長

河端 秀朗

カリタス学園は東京都と神奈川県の間を流れる多摩川が徒歩5分のところにあり周囲を梨畑が点在する閑静な環境の中で幼稚園から高等学校まで2,000名余りの子ども達が学んでいるカトリックミッションスクールです。また横浜市のおざみ野というところには英仏2言語の教育を特色とする短期大学が設置されています。

昨年度、福井大学教職大学院とカリタス学園との間で院生の派遣に関する協定を締結し、2015年度より教職大学院に学園の教員2名（小学校、中学高等学校）を派遣しています。

元々教職大学院教授の松木健一先生には長年に渡って小学校の研究指導講師としてご指導をいただけてきました。そして現在では年に一度、学園の全教職員が集まって行っている学園研修会へも継続的に来園いただき、全体会で講話をしていただいています。そのご縁で、カリタス学園の一貫教育を展望するための指針を築くために、院生を派遣するとともに、教職大学院の先生方に各校種の授業研究や研修のご指導をいただくことになりました。

本学園の課題は、建学の精神＝教育理念によって目指す人間像は示されているが、どのような教育のプロセスを経て、そのような人間の土台を築いていくのかというビジョンが見えていない点にあります。子どもの視点に立つ、つまり子ども達を2本のレールの上を走る列車に例えて本学園の教育を見据えていくと、このような問題点のあることが分かります。「建学の精神」というレールは幼稚園から高等学校までつながっていますが、各校種の「教育の特色」というレールは途中で分断されていると子ども達自身が感じているのではないかと。肝心なことは、教育を受ける子ども達の眼から見て、学園の教育が一貫教育と呼ぶにふさわしいレールとして見えるかどうかであると思います。ある保護者が上部の学校へ進んだ際に「まるで違う学校に進学したようだ」とつぶやいていた。恐らく子ども達も同じように受け止めていると考え

られます。つまり子ども達にとって上部の学校に進むには異なるレールの上に列車を置き換えなければならないと受け止めているということになります。

私達は一貫教育を受ける子どもの眼から学園の教育を俯瞰することが出来なくなってしまっているのではないだろうかと思えます。子ども達自身が上部の学校へ進学した際に一筋のレールを上っているという学びの実感を持つとき、初めてカリタス学園は「一人ひとりを大切に」教育を実現していると胸を張って言うのではないだろうかと考えています。

そこで、改めて本学園の各学校の教育の特色、つまり幼稚園の「モンテッソリ教育」、小学校の「総合教育活動」、中高の「教科センター方式」を俯瞰すると、いずれの教育も「子ども一人ひとりの自律」を育む教育という共通項で結びついていることが分かります。つまり、「自律」を核とするレールでつながっているはずなのです。しかし、それが子ども達にとって実感を伴うものになっていないのであれば、そのようなレールを敷くために学園の教員は必死になって敷設工事をしなければならないと思います。このような敷設工事をするために「絶えざる刷新を目指す」志を持った教員を福井大学の教職大学院へ派遣すること、そして福井大学の先生方に来園いただき学園の各学校の授業研究のご指導をいただくことを通して「目的意識を持って自律的に学ぼうとする人間の土台を育む学園づくり」に寄与して欲しいと心より願っています。

この「自律」を核とした学園の一貫教育について学園の教職員一人ひとりが明確に意識し、建学の精神と共に2本のレールを幼稚園から中学高等学校まで敷くことによって子ども達一人ひとりが将来「開花」するために地中に深く根を張れるよう導いていかねばならないと思います。

中教審教員養成部会

「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」 答申素案を読む

福井大学教職大学院・教授

松木 健一

中教審教員養成部会では、中間まとめ（2015年8月）を元に議論を重ねてきたが、答申素案を公表する段階に来ている。ここでは答申素案の中の教職大学院の在り方にかかわる部分について報告したいと思う。まずは、答申に先立ち、教員養成（教師教育）の動向を振り返ることから始めたい。

教員養成計画の難しさの一因は、少子化と教員退職者数が相似曲線を示さないことにある。少子化の進行に伴い、教員需要も同様に減少するならば比較的予測しやすいのだが、少子化しつつも最近まで大量退職時代が続き、都市部では安定した教員需要を見込めたことが、事態をより複雑にしている。私立大学では教員採用増加を見込み、2000年頃から小学校の教員免許状を取得できる学部を創設してきた。小学校教員免許状の課程認定校の数は、2004年度には44大学であったものが、2008年度には117大学に拡大している。その結果現在では、私立大学を含む一般大学が、小学校教員採用の6割以上を占めるようにまでなっている。

こういった教員採用数の多さは、教職大学院の学部新卒院生の入学にも影響を与えている。教職大学院に進学するよりも、なれるうちに教員になってしまいたいとする学生意識は、至極もつものことであろう。その一方で、教員採用数が少ない地方では、進学よりも非常勤講師をする方が採用に有利とする意識もはたらく、大学院への進学をあきらめるケースも見られている。

社会構造の変化に伴う新しい学力観への転換や、それを支える教師の力量形成（高度化と専門職化）を推進すべく創設された教職大学院ではあるが、増えていた教員需要の前に、学部新卒院生の入学者確保は困難を極めているのが現状である。また、スクールリーダー（現職教員院生）の入学に関しても、当事者がちょうど家庭内で出費が重なる年齢であることとも重なって、財政負担が入学の大きな障壁となっている。

平成24年の中教審答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、「学び続ける教員像」が打ち出され、教員養成から生涯にわたる職能成長への転換と修士化が謳われたが、教員需要のあること

が、修士化（高度化）の歯止めとなってしまった。しかし、教師が「学び続ける教員」であることは高度専門職業人として必須のことであり、また、社会構造の変化とそれに伴う学力観の転換を受け、教師自身が変わらなければならないことは、一層喫緊の課題となってきた。こういった実態を踏まえ「国立大学のミッションの再定義」（2014年8月）では、全ての地域で、教職大学院の設置を目指すこととなり、各大学は入学者の確保が厳しいことを踏まえつつも、小規模ではあるが開設準備を進めている（2016年度は17大学に開設される）。

ところで、教職大学院の成長を3区分するならば、第1期は教職大学院の創設期（2008年）以降、第2期は全ての地域に教職大学院の設置が目指されている（2015年）以降となろう。この第2期の特徴は、教職大学院の設置に伴う教師教育の実現には、教育委員会と大学の連携が、曲がりなりにも大前提となったことである。至極当然のことであるが、これまで教育委員会と大学が無関係に教員養成（教師教育）をしていたことを顧みると隔世の感がある。

さて、これに続く第3期は教職大学院の充実期となろう。第2期に全ての地域に教職大学院ができて1,000名ぐらいの入学者数では、100万人もいる教員集団の中ではパワーポリティクスが働かない。各大学は失敗を恐れ最小規模の教職大学院を設置しているが、これでは教職大学院の効果は期待できない。第3期は、入学者への財政支援や、教員研修とリンクして長期間かけて履修できる大学院制度（在籍は1年）、そして、勤務しながら校務分掌を支える大学院制度（learning by doing）等の整備を進め、全ての現職教員に門戸が開かれた教職大学院に発展させることが求められる時期となろう。

今回の答申は、この第3期に向けた助走的意味合いを持つと思われる。答申素案では「学び続ける教員像」をより具現化すべく、何段階かの育成指標（専門性基準）を、大学と連携した育成協議会（都道府県教育委員会が設置）が作成し公表することで、生涯にわたって学び続ける専門職の階梯を構築しようとしている。また、ミドルリーダーや管理職のコースの設置を求め、教職大学院と教員研修改革とリンクさせようとする意図が見える。専門職の高度化に関し

て言うならば、平成24年度の答申の行き詰まりを踏まえ、教員養成段階から（若い世代から）順次、高度化を実現していくのではなく、教職大学院に管理職養成コースの設置を求めることで、いわば熟練者から高度化を実現しようとするものとなろう。

退職教員のピークが過ぎた現在、これから教員採用の減少が進むとみられるが、薬学部等の改革の推移から予想するに、教員養成の縮小は国立大学で対応することが求められ、否応なく

国立の教員養成系学部はウエイトを教師教育（現職教育）にシフトしていくことになるのではないかと。つまり、教員になる前の教育機関から、教職生活全般を支える機関への変貌である。むしろチャンスと捉えるべきなのであろう。教職大学院が全ての現職教員に開かれ、財政的にもカリキュラム的にも無理なく入学することができ、日本の教育改革の中核になることが求められて来よう。

10月合同カンファレンスに参加して

新しい世代を支え学び合う

長期実践研究報告・1年目のまとめの構想に向けて

スクールリーダー養成コース1年／奈良女子大学附属中等教育学校

塩川 史

夏期集中講座以来の福井だった。えちぜん鉄道はいつのまにか高架になっており、しばらくだなあと思う。福井に来ることがマイルストーンとなり、前回から何があったかと思い返してみたりもする。離れてわかる日常。

10月のカンファレンスでも、どっぷり浸ってしまっただけでわからなくなる自分の日頃の実践をふりかえることができた。また違った実践に触れることで、教育に対する自分の「皮膚感覚」を確かめ（少しは）感度を上げることができた気がする。

カンファレンスは高志高校の西繁寿先生によるプレゼンテーション「新しい世代を支え学び合うことの意味」から始まった。西先生は、高校2年数学を担当する個性的なメンバーの持ち味を生かし、授業改善の議論ができる教科会を開いてこられた。奈良県の公立高校2校の経験からでしかないが、高校教員は優秀でありながら、特に教科指導において各自が自分の城を守っていることが多いように思う。西先生はそんな教員に「広場」に集う楽しさを伝えることに成功されたのだ。さらにその広場には他教科の教員も集まりだしているという。そんな教員集団であれば、教師が引き上げるのではなく、学ぶことの楽しさを知って生徒が自身を引き上げていく授業も可能であろう。教科の学習の中でどれだけ「ほんもの」を生徒に示せるか、だ。

午前中のグループセッションでは、同僚と学びあった経験を異校種、他教科の先生方と共有した。「新しい世代」代表のストレートマスターの

インターンシップ体験談は、小学校ということもあり新鮮であった。各小学校から代表が参加する連合体育大会を通して6年生の児童が成長していく様子が報告され、なぜそれが可能だったのか意見を交わした。「最高学年」として、また「学校の代表」としてきちんとさせる指導が行われていた。しかし、私は連合体育大会で優勝を得ることになる子どもに対し、先生がなさった指導の方に、「ほんもの」を感じた。先生はインターンとして専任教諭に支えられている実践として報告されていたのだが、支え支えられる、というのが事実ではなかったか。インターンという立場は大変やりにくいだろうが、実習校で行われていることを客観的に見られるという点でうらやましい立場だ。「ほんもの」とそうでないものを感じ分ける皮膚感覚を磨いていかれると良いと思う。

6月の教育研究集会に参加し、夏の集中サイクル1で実践記録を読んでいた福井大学附属中の先生から、実際に学年プロジェクト（学P）の話を知り、実践はより身近になった。学Pは3年間ひとつのテーマを扱う。教師も生徒も本気で、長く深く取り組んでいるのだが、テーマや活動の設定に関して生徒が議論する時間を十分とっている。学年全体でのディスカッションが成立することは驚きだ。意見を発表するだけではなく、聴き合い語り合うというコミュニケーションの土壌ができており、それは見せていただいた英語の授業にも表れていた。どこに行き着くのかわからない学P、そのワクワク感、ライブ感がauthenticな「ほ



んもの」として生徒は夢中になって学ぶのだろう。

午後は自分自身の実践の「挑戦」を語る教科別グループセッションで、私のグループには松田先生の元、異校種の英語科教員が集まった。コミュニケーションな授業を行ったことにより、テストで試される「学力」が低下し心配だという話、知識の活用が求められているがその前に知識をつける必要があるという話が出た。ディスカッションよりも本文を丁寧に解説する授業がしたいという声すらあるという。こんな本音を出し合ったが、こういう議論はもう何年も続いている。コミュニケーションの英語vs.受験の英語という二項対立に留まって、それを嘆くだけでは何も変わらない。英語を英語で理解させ、学習者が英語を使うことで理解を深め使えるようになる授業は可能だ。つまり、コミュニケーション重視で受験

にも対応できる授業だ。例えば高校レベルでは、gistをつかませる予習課題、生徒が能力に応じて取り組める活動や、定着のためでもあるoutput課題を入れた授業を組み立てる。奈良女子大学附属の英語科カリキュラムは、6年を見据えて構成され15年になる。3年生以降6年生までcontent-basedで4技能が統合するようデザインされたカリキュラムである。授業は「実技」教科として、生徒が英語を使うことを大切にして英語で進めてきた。その結果、手前味噌だが一定の成果を上げてきたと思う。今年、さらに深い学び、協働の学びが可能になる授業を組み立てていこうと、有志で試行錯誤を始めた。2月20日の公開研究会「21世紀における学校の役割をめぐる対話—実践交流ラウンドテーブルNARA2015—」の午前中、Zone C「21世紀の学校・教師」の分科会「Dynamic thinkersを育てる英語授業のデザイン」を開く。午後のラウンドテーブルと合わせて、ぜひ参加いただきご指導をお願いしたい。

ここまで報告してきた10月のカンファレンスのテーマは「新しい世代を支え学び合う」であった。社会、家庭、生徒の変化が著しい現在にあっては、かつての経験など役に立たないことがある。むしろ、妙な「信念」や「こだわり」を持たずに目の前の現実を見、行動力もある若い世代からベテランが学ぶことが多いようにも思う。1年目の後半が始まった。少なくとも、考えをこんなに苦勞せず綴れるよう、奥行きのあることばで表せるよう、新しい世代に負けないよう勉強しようと思う。

スクールリーダー養成コース1年／奈良女子大学附属中等教育学校

佐藤 大典

2ヶ月ぶりの福井であった。福井駅に降り立つとひんやりとした空気がする。8月のあの暑い3日間がはるか昔のように感じられる。えちぜん鉄道の乗り場も変わっていた。いよいよ後期がスタートする。身の引き締まる思いで電車に乗り込んだ。

今回の合同カンファレンスのテーマは「新しい世代を支え学び合う」である。オリエンテーションでは、高志高校の西先生の「新たな試み」について報告があった。数学研修を通して普段の授業を見直す。また、あえてオープンスペースで実施することで、他教科や学年団にも影響を与える。このように、小さな「さざなみ」が学校全体を変える大きな「うねり」となることが実感できた。

その後のグループ・セッションでは、先ほどの西先生の報告を踏まえて、「アクティブ・ラーニング」について話し合った。この半年間でこの言葉は何度聞いたであろうか。アクティブ・ラーニングはグループ学習ではない。そして、「アクティ

ブ」にもレベルがあり、個人で静かに考えさせるだけでも「アクティブ」にさせることはできる。それでは、アクティブ・ラーニングを通して、生徒たちにどのような「学力」を付けさせることができるのだろうか。そもそも「学力」とは何か。もし、知識を身に付けることが「学力」と定義すれば、アクティブ・ラーニングでは「学力」は付かないであろう。

午後のグループ・セッションでは、教科ごとに分かれて「自分自身の実践の挑戦」を語り合った。ここでは、数学の授業における「グループ学習」について議論した。特に話題になったのが、グループのメンバーの構成である。席が近い者同士など機械的にグループを作ると、どうしても「できる生徒」と「できない生徒」の偏りが生まれる。その結果、グループによっては、課題の深まりに差が生まれてしまう。それでは、教師側で「できる生徒」と「できない生徒」のバランスを考慮してグループを作るほうがよいのだろうか。しか

し、この場合では「できる生徒」が「できない生徒」に教えるだけの「一方的な学び」になってしまいう可能性もある。結局、よいグループ学習を行うには、メンバーの構成ではなく、課題の設定であろう。知識はもちろんのこと、想像力、表現力、コミュニケーション能力など、さまざまな「能力」を駆使して考えさせるような課題がグループ学習に最も適した課題である。そして、このような能力が、生徒たちに身に付けさせたい本当の「学力」ではないだろうか。

今回の合同カンファレンスを通して、改めて「アクティブ・ラーニング」や「学力」について考えさせられた。そして、今回学んだことを自分自身の授業で実践することで、現任校における小さな「さざなみ」になればと考える。



教職専門性開発コース1年／福井市中藤小学校

山田 芳裕

日増しに秋も深まり、朝夕が肌寒く感じるこの頃、10月の合同カンファレンスに参加した。インターンシップ（以下インターン）をさせて頂いている中藤小学校も、数日前に2学期がスタートしたばかりである。これまで3学期制しか経験して来なかった私にとって、このタイミングに学期の節目が訪れる感覚が新鮮でならない。人生初の秋休みも終わり、一層気を引き締めてカンファレンスに臨んだ。

今回は午前「新しい世代を支え学び合うことの意味」をグループごとに検討し、午後は主に教科ごとに分かれ、「授業実践の挑戦、探究の過程を語り合う」こととなった。朝のオリエンテーションでは、高志高校西先生の「2年数学研修」の実践コミュニティについての発表があった。様々な世代の教員でメンバーが構成されており、若手・ベテランに関係なくフラットな立場で話し合いが出来ていること、また開かれた空間で話し合いが行われるため、他教科にも良い刺激を与えている、とあった。発表の中で私は、「日々の雑談の中で本質的な部分を捉えている」といった点に深い関心を寄せた。私達ストレートマスターの院生は、週に3回拠点校でのインターンを行っている。その中で私を含む同期（M1）の院生は、インターンが終わると院生室に戻り、その日にあった出来事を日々共有している。これは意識的に始めた取り組みではなく、単に「今日こんなことがあって～」と、いわゆる「雑談」をしに院生室に集まったことから始まった。インターンを過ごす上で気になった出来事、例えば、「今日〇〇先生の授業が凄かったん」、「〇年△組の〇〇さん、今朝元気なかったなあ、どうしたんやろ」など、話す内容はただの「雑談」である。しか

し、児童との関わりの中で生まれた悩みを打ち明け、相談に乗ってもらったり、授業実践の計画を立てる際には、私が考えもつかないアイデアをもらったりと、今後のインターンに生きていく会話も少なくない。私自身、この半年のインターンで同期の院生の言葉には非常に助けられた。高志高校の先生方のコミュニティと多少ながら、リンクしている部分があるように感じた。互いに切磋琢磨し、高め合っている今の環境に感謝している。それと同時にこれから私が新しい世代の教師として、学校現場でどのような立ち振る舞いをしていくべきなのか、改めて捉え直していきたいと思う。

午前の「新しい世代を支え学び合うことの意味」については、授業実践を通して、児童生徒の成長を感じるといった話し合いであった。授業において「教え込むべき」点と「児童生徒の自主性を重視する」点のバランスが難しい。授業を長期的なスパンで捉え、児童生徒の活動を常に意識して見てみることも、微々たる成長を見つけるためには欠かせない。以上の話し合いから、どの授業に関わらず、子どもの主体的な学びにつなげる第一歩として感じることもある。それは授業の中で「児童生徒が夢中になる」場面をつくることである。「無我夢中になって取り組む」姿勢・意識を持つことで児童生徒の考えが深化し、更なる学びに繋がるのではないかと。しかし前述した通り、お互いのバランスを無視することはできない。いかに両方の良い所を共存させた授業を作っていくかが課題であり、これからの教育を担っていく世代としての責務のように感じる。

午後は授業実践の挑戦ということで、私のグループは「体育」を専門教科としている先生方

が集まった。私も専門教科が体育ということもあり、先生方の「体育に関する授業観」を吸収したいと期待し、話し合いに臨んだ。体育は授業場所や服装など、他教科と違う点が多い教科である。また好き嫌いや、能力が顕著に表れることも体育の特色のように思う。そのため、苦手・嫌いと感じる児童生徒への対応にこれまで悩んできていた。先生方の意見としては、「体育は目標を持たせやすい教科である。教師として重要な視点は『子どもにどのような力を付けさせたいのか』ではないか。子どもに沿った明確なねらいを立て、学習する上で自ら気づいていける環境整備が求められる。」、「中学では、なぜその動作が出来るようになったの?という所までつっこんでいかねばならない。その時々で、子どもが技能を欲しがると指導していく。つまり子どもが「必要」と感じた時に、

教師が手助けを行うことが重要なのかと思います。」などが挙げられた。以上から、教師の視点は様々だが共通して「児童生徒を理解し、見る」といった点が重要であると感じた。子どもの姿を日々観察し、その子どもの微々たる成長も見逃してはいけない。「なぜ出来るようになったのか?」、「どういった動きをしたから出来るようになったのか?」を追求していく。そうすることで子どもが自発的に考え、気づき、実践していくのではないだろうか。それこそ体育科としての最も重要なポイントであるように思う。

今後のインターンでは、先生方が授業を行う上で意識している点を、自分なりに分析していければと思う。非常に有意義な月間カンファレンスになり、また一つ自分の知見を広げることが出来たと実感している。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

教職専門性開発コース2年／啓新高等学校

藤井 真衣

私たちストレートの院生は、週2～3日（人によっては週5日）の学校インターンシップの他に、大学院で毎週カンファレンスをしています。木曜日に行われるため木曜カンファレンスが通称です。木曜カンファレンスは、午前の部2コマと午後の部2コマに分かれています。午前は①インターンシップ先で得た学びの報告会と②テーマ別討論会で、テーマ別討論会は院生が持ち回りでテーマを決めるところから運営します。院生が主になって担当する企画ということで、主担当企画と呼ばれます。午後は①授業案作りと②公教育についての資料読解で、教職大学院の先生のご指導の元、ストレート2年の院生が運営しています。この主担当企画と午後の部の運営において、最近、とても自分の未熟さを痛切に感じた出来事がありましたので、今回はそれを記したいと思います。

まずは主担当企画です。私を含む6人の院生が11月の担当でしたので、10月の下旬から何をテーマにどのように4週間を組み立てるか話し合いました。まずは各自、やってみたい案を出します。学級経営、公開研究会、読書活動、特別活動…など出し合い、それぞれ何を院生で話し合い、どこに着地点を持っていくか掘り下げて考えます。主担当企画のテーマは「話し合いをすることで各自が考えを深められる」ことが大切だと考えていた私は、院生で議論をするに値するかという観点

で案をしばるべきなどと提案しました。じっくりと議論が重ねられた末、「言語活動」というテーマでNIE活動やビブリオバトルを実際にやってみながら、今後の実践に生かせる言語活動を考えるという案にまとまりました。院生で話がまとまると、次は午前のカリキュラムをとりまとめている小林真由美先生に提案をします。提案を聞いた小林先生の「案自体は面白いと思うけれど、午前の本質から逸れていないか。午前のカリキュラムで最も大事なことは、各自の実践と絡めるということ。話し合いの中に、常に各自が関わっている子どもたちの姿が浮かばなければならない。この案では、各人の実践やインターン校と絡めた話し合いを展開できないのではないか」というお言葉に、はっとしました。小林先生がおっしゃった午前の部の本質を、なぜ言われる前に気づくことができなかつたのか、とても悔しい思いでした。企画する者として、2年生として、主担当企画をもっと俯瞰的に捉える必要があったのです。自分の視野の狭さを痛感しました。

次に、午後の部の運営です。午後の部の授業作りは今年度から行うようになったもので、関わる人全員が手探り状態で進んでいます。この授業作りに関する最初の話し合いで、午後の部をとりまとめている柳澤昌一先生が次のことをおっしゃいました。「3ヶ月で6つ授業案を作る。10月は1

つ、11月は2つ、12月は3つ作り、合計6つ。教員というのは研究会などの大きなプロジェクトを抱えながらも日々授業を進めなければならない。明日の授業を練るつもりで準備する練習をしよう」これを聞いた私の頭の中は「短期間で準備した授業案なんて、質の低いものしかできないし、教職大学院でやる意味がない」と不満だらけでした。実際にその不満は声に出していました。しかし、柳澤先生の「3ヶ月に6つの授業案を作らなければならないということが、まず動かすことの出来ない課題として目の前にあるのだ」というお言葉に、やはりはっとしました。今やるべきは、目の前の課題を受け入れ、課題の制約の下で最大限の学びを生むための運営方法を考えることであり、不満や問題点を指摘することではなかったのです。出る言葉が不満や問題点というのは、運営するという意識と自覚が足りていない最も端的な表れです。2年生になって半年が過ぎ、やっとそのことに気づきました。

この二つの出来事に共通するのは、運営する側

としての意識の欠如だと思います。これまでは自分がやりたいと思うことを提案し行動するだけでした。しかし今後は、自分たちがなそうとすることが教職大学院での授業の本質に合致しているのか、教職大学院の今後にどのような影響を与えうるのか、最大限の学びとするために何が提案できるかといったことも考えていく必要があるのだと思います。今までよりもはるかに視野を広げる必要がありますが、今ようやくそれに気づく段階に自分がたどり着けたということでもあり、肯定的に捉えています。そして今後挑戦していく課題がはっきりと分かったということでもあります。大学院生活も残り半年を切りましたが、課題への挑戦の機会はまだまだ多くあります。教職大学院のカリキュラムが挑戦の機会を与えてくれることもあれば、院生が与えてくれることもあります。出来る限り多くのことを思考し、学び、得たものをすばらしい個性を持った仲間や逞しく頼もしい後輩のために返していけたらと思います。

教職専門性開発コース1年／坂井市立丸岡南中学校

山田 晃大

教職大学院に入学して半年がたった。外では木々が色づき始めている。せつかくの機会なので、あつという間に過ぎていった半年間のいくつかの出来事や活動について振り返ろうと思う。

自らのふるさとである、福井の子供たちを育てていきたい。これは、私が教員を目指す理由の中の一つだ。現在私は、福井大学教職大学院のストレートマスターの院生として拠点校である坂井市立丸岡南中学校にてインターンシップを行っている。ここでの様々な活動の中で、生徒達と触れ合い、彼らの成長の手助けをしている。そこで体験の一つ一つが、私にとってのやりがいであり、喜びだ。中でも「山田先生のおかげで数学ができるようになった。」であったり、「山田先生の授業楽しかった。」であったりという言葉が生徒からもらえると、大変喜ばしい。学部生時代に個別指導学習塾での講師をしていた経験があるため、個別指導の経験は長い上に、理学部数学科で4年間数学を専門的に学習してきた身としては、「数学の面白さ」についての知識は誰にも負けないという自信がある。私はこのような体験から、自分にできることは、「数学の面白さを伝えていくこと」なのではないかと考えるようになった。

福井大学教職大学院のストレートマスターの院生は毎週木曜日に、木曜カンファレンスと題した大学に集まっての活動を行う。そこでは、インターンシップ先での体験を語り合ったり、それに対して議論し合ったり、教育の諸課題について学び合ったりする。「数学の面白さを伝えたい。」

という考えをその場で話したところ、実際の私の授業の様子を聞いた先生から「数学の面白さを感じさせるという伝え方も、味合わせるといふ伝え方もあると思う。」というご意見を頂くことができた。このように木曜カンファレンスでは、インターンシップでの体験を振り返り、意見を頂くことで、自分の教師観や教育観を深めていくことができる。

教職大学院に入学して、いま日本の教育界で盛んに言われているアクティブラーニングやディープラーニングについて学ぶ機会が沢山あった。これら2つの学習形態に関する言葉を一言で表そうとすると、その意味が間違えて伝わる恐れがあるため、ここで述べるのは避けることにするが、私は理学部数学科出身として、そして実際に中学校にてインターンシップをしている身として、この流れに対して少々違和感を持っている。

アクティブラーニングに関連した数学の授業を参観したり事例を読んだりすると、実験や観察をもとにして法則を見つけ出させることで教科の指導を行うという授業形態が目立つ。良い部分もあると思うが、理学部数学科出身の身としてこれを見ると、数学の理科的な部分を押し出しすぎていて、論理的に物事を説明したり解を導いたりするといった、数学の真に数学的な部分が軽視されている気がする。また中学校にてインターンシップをしている身としては、このような活動は、生徒ごとの成長段階に差がある学級で行うのは難しいのではないかとも思う。

ディープラーニングについては、数学を専門的に学んできた私としては、ある意味理想的な学習形態だと感じている。一筋縄ではいかない問題に対して粘り強く取り組むことこそ数学の醍醐味である気がするからだ。しかしながら、実際にそれを重要視すると、今度はアクティブラーニング信者の方からご批判を受けることもあるだろう。以上のように、「数学の面白さ」に対する考え方は教育界においてもいろいろあるようだ。

少し話がそれた。思えば私は、4月のニュースレターでの自己紹介にて、「生徒の「生きる力」を育てていける、確かな指導力を身につけていくと共に、教員の仕事について学んでいきたい。」と述べていた。その気持ちのもとで、職員の一員としてインターンシップ先で活動することで、やりがいも学びもある半年間を過ごすことができた。これまで書いてきたのは、授業を参観させていただいたり、実際にさせていただいたりといったこ

とに関する話だったが、それ以外にも数学のフリースペースの掲示物更新や卓球部の副顧問もさせていただいている。初めの頃は、理学部数学科の学生だったときの振舞い方から抜け出せず、どのようなスタンスで現場の先生方や生徒達と接すればよいか戸惑っていた自分がいたが、今ではそれにも慣れ、教科書のページをプロジェクターで黒板に投影しての授業や、パワーポイントを活用した解説など、新しいことに挑戦することも出来ている。フリースペースの掲示物更新の活動からは、「数学の面白さを伝えたい。」という考えに至るきっかけを得ることができたとし、卓球部の副顧問としての活動では、生徒とのかかわり方についてじっくり考えることができた。今後は、これらの活動を続けると共に、「生徒の「生きる力」を育てていける、確かな指導力を身につけて」いけるように、さらに多くのことに挑戦していこうと思う。

スクールリーダーだより

高浜町立青郷小学校 砂原 亘

高浜町立青郷小学校は福井県の最も西に位置する、全校児童数176名、8クラス（特別支援学級含む）の学校です。以前より人権教育を教育活動の中核に据えて仲間づくりを大切にしてきました。掃除や大休みに行われる遊びを縦割り班で行い、また異学年が組んで遊ぶ活動を行っていることもよい学校の雰囲気を作っていると思われまふ。業間にはチャレンジタイムと称してマラソン、竹馬、大縄跳び、一輪車に縦割り班で取り組み、体力の増強にも取り組んでいます。



教職員は20名で年齢は20～40代が多く、若手と中堅が現場を動かしているという現状です。職員室の雰囲気も良く、笑い声がよく聞こえます。

今回のスクールリーダーだよりでは、本校における研究について書かせていただきます。

本校では、ここ数年、子どもたちに「生きる力」をつけるために、子どもや教師が学び合い協働性を高めることを目標として教育活動に取り組んでいます。教師は教室を拓いて授業公開を重ね、子どもの姿を通して語り合える授業研究会を創り上げ、年間を通して小グループで自身の実践や見取った子どもの姿を語り合い、省察し、レポートにまとめることもしています。また、「個」と「集団」が関わり合って学習する場面（子どもたちが協働する場面）を設定することを意識して授業に臨む教師の姿が見られるようになり、子どもたちの「集団全体」の力を伸ばすこともできてきました。ここ数年の取り組みの成果として、それらが青郷小学校の学校文化になりつつあると思ひます。

しかし、子どもたちの学習意欲を継続・向上させるような学習活動を展開することがあまりできなかったと省察しています。つまり、学校

教育目標にある「自ら」学ぶ子の育成に迫り切れていなかったということです。これでは「生きる力」が育まれているとは言い難いと考えます。

そこで、「自ら学び、協働する子」という学校教育目標の下、今年度も「協働して学びを深める授業の創造 ～自ら考え、豊かに表現する子の育成～」を研究主題として掲げました。そして今年度の具体的な取り組みとして、①教科学習や体験活動において「自ら」意欲的に学んで「生きる力」を育む、②「読む」力と「書く」力を育む言語活動の更なる充実（授業改善・読書指導）、③子ども同士がつながり、子どもと教師がつながり、教師同士がつながるという「協働」の3点に重点を置いて実践を重ねています。

実践の具体例として、①の「自ら学ぶ」では、まず問題を提示してそこから課題を設定させました。例えば算数科の異分母分数のたし算だと、

$$\frac{2}{3} + \frac{1}{4}$$

を提示して、「今日は何の勉強をしたいですか。」「今日は何の勉強をしよう?」と児童に聞き、「分母の違うたし算。」「それを調べる。」という児童から出たキーワードから「分母の違うたし算について考えよう。」という課題を設定しました。②の「言語活動」では、例えば国語の物語教材において文中から気持ちや様子を読み取り、教科書に書き込みながらその様子や気持ちが表れるように音読する学習を行いました。そうすることで、表現することを意識して音読することができるようになってきました。③の「協働」では、グループ活動やペア学習を取り入れています。その際、特定の児童の発言で話し合いが進むことのないよう、発言しやすい状況や聴き合いやすい状況を作るようグルーピングを工夫したりしています。

この①②③はそれぞれが独立して機能するわけではなく、相互に関連しながらその価値を高めていかなければなりません。本研究が①②③を通して目指すところは、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ「アクティブ・ラーニング」です。それは、この学習・指導方法が知識・技能の定着のみならず子どもたちの学習意欲を高める上でも効果的であると思われるからです。

また、研究主題を具現化していくには、私たち教師の協働も必要です。授業を互いに公開する（授業と向き合う）ことや個々の実践を振り返り共有する（子どもの学びを見取り、語り合う）こと、授業以外の活動においても教職員間

の同僚性を高めることで、協働する組織に成長することができると思います。そして教師自身が学び続け、校内研修会等を通して学びを振り返り、省察し、今年度も個人研究レポート（実践記録のデータ化）という形でまとめることで教師も成長していきたいと考えています。

さて、本校の授業研究会は小グループでの見取り・小グループでの研究会をスタイルとしています。Aグループの先生はAグループの子どものみを見取り、その様子を語り合います。授業参観中は、後ろからでは授業者と板書しか見えないため、グループの周りで子どもの顔や様子を見ることとなります。この「見取り」をもとにした授業研究会では、子どもの様子を話せばいいのですから経験年数に関係なく若手も話せます。また、この授業研究会は授業者の授業力を向上させ、さらには学校全体の力の向上につながる研究会です。



一昔前の授業者としての私は、「早く授業と研究会が終わってほしい。終わったらすっきりする。」という考えでした。授業研究会も口の字型の机の配置で全員での話し合いというスタイルで、あまり発言が見られず、発言しても後が続かなかったように思います。また、「考えがずれていないだろうか。」と思うのか、若手が発言しにくかったように思います。話し合いの内容は、授業の流し方・発問など授業者に対しての意見が中心であり、子どもの姿を無視していたとも言えるでしょう。

しかし、小林真由美准教授によると、「今や授業者の力量形成のための研究会ではありません。様々な価値観を持つ先生方が共通の課題（子どもの姿）をもとに経験や知恵を出し合い学び合う場であり、管理職もベテランも若手も授業を通して学び合い、語り合い、聴き合う場、つまり協働の場なのです。」ということです。

以下は、実際の授業研究会の持ち方（KJ法）です。

この授業研究会では研究会全体が温かい雰囲気

気に包まれます。もちろん授業者に対しての意見や質問はありますが、基本的にこの研究会を通して自分も成長することが参加者も分かっているからでしょう。また、この研究会では授業者が気づかなかった子どもの思考が分かるため、次時の授業に生かすことができます。さらに、同じ子どもの仕草や思考を見取った者同士が語り合うため話が盛り上がり、そこには教師の協働する姿が見られるのです。そして、今までの本校の全体会形式の研究会ではありえなかった自分の姿が見られるのです。

本校がこのようなスタイルの授業研究会を行うようになって数年が過ぎました。今後も子どもたちの協働はもちろん、教師も協働して、研究主題「協働して学びを深める授業の創造～自ら考え、豊かに表現する子の育成～」を目指し

てさらに実践を積み重ねていきたいと思いません。



美浜町立美浜中学校 山口 有一

美浜中学校は福井県の南側（嶺南地域／若狭地方）にある美浜町で唯一の中学校である。美浜町内の7つの小学校（今年度小学校の再編があり現在3校）から生徒が集まり、9クラス237名、教職員25名（20代が6名、30代が6名、40代が7名、50代が管理職を含め6名）の学校である。これまで毎年新採用教員を1名～3名迎え、町内出身の教員以外はほとんど異動してしまうため、入れ替わりの激しい学校である。今年度は有り難いことに初めて新採用教員が一人もいない珍しい年度である。

平成20年度から福井大学教職大学院の拠点校として、学校の研究体制を変革し、授業研究を校内研究の柱に据えて研究を進めてきている。また、毎年教員が1名教職大学院で学んでいる。これまで4人が教職大学院で学んできた。私が5人目になる。

平成19年度までは「学習指導」「生徒活動」「健康」の3つの研究組織がそれぞれの研究主題に沿ったテーマを掲げ、毎月予定されている全体研修会や研究会を独自に企画・運営していた。平成20年度（拠点校1年目）に研究推進部会を立ち上げ、これまでの3つの研究部会を一本化し、公開授業と小グループによる授業研究に踏み切った。そして、新しい授業研究システムと組織形態（授業研究グループ）を構築していった。

平成21年度は、研究主題を「学び合い、高め合う個と集団づくり～協働の学びを通して～」とし、「グループ学習を積極的に授業に組み入れる」「学習課題を工夫する」ことに視点をあてた。

平成22・23年度は、『毎回行われる授業研究のつながりが見えてこない。本当に生徒の学びにつながっているのか。「授業改善」の必要性は漠然と感じているかもしれないが、優先順位は高くないかもしれない。』など、やっていることに新たな「何か」を加える必要があるように感じていた。

平成24・25年度は、どうすればさらに発展していくのかという迷いを抱きながら、研究主任一人で悩むのではなく、研究推進委員の協力をもっと得ていく必要があると感じていた。

平成26年度は、私が初めての研究主任を経験することになり、前任までの流れを変えることなく、全く同じように研究推進を進めていく中で、課題として、「若手教員の育成（指導技術の向上）。教科の専門性の低下。授業研究の停滞感・マンネリ化。」といった点を感じた。そこで、平成27年度は、6年間同じ研究主題で取り組んできたサブテーマを「～『分からない』が言え『分かった』が味わえる授業づくりをめざして～」に変更して、その意図を説明することから、研究推進に関する共通理解を図り、スタートを切った。今年度は、気心の知れたメンバーで構成した研究推進委員会を頻繁に行い、研究推進委員会のメンバーを各授業研究グループの核として自分の考えを広げるよう仕組んでいる。そこでの意見を研究に反映させ、回を追うごとに公開授業や事後研究会に少しずつ手を加えてきた。

最初に研究体制の改革が行われてからこれまでの研究の積み重ねによって、また、平成21年9月に完成した新校舎のオープンな造りによって

自由に授業を見合う文化が出来てきている。教科の枠を解いて授業を見合い、生徒の姿から授業を語る事後研究会も当たり前になっている。しかし、取組としては同じような課題を感じつつ、ぐるぐると迷いながら同じレベルで研究を進めてきている感が否めない。教員の入れ替わりが激しいことが一つの理由ではあるにせよ、

学校文化として目に見えて積み上がってきているものがあってほしいと感じる。これまで教職大学院で学んできた5人で、これからの美浜中学校の研究について座談会をもって、何かヒントが得られないかと考えている今日この頃である。

福井県立勝山高等学校

吉川 長利

勝山高等学校は福井県の北東部に位置する勝山市内にある全日制の高等学校です。地元の人々から「かつこう」の愛称で呼ばれ、地域の学校として勝山市の方々から様々な面で応援を受けながら、将来の地元の担い手となる人材を送り出すことを目標に教育を行っています。

勝山市は平成26年度から文部科学省の英語教育強化地域拠点事業の指定を受けています。市内には3つの中学校があり、それぞれの中学校の校区には3つの小学校があります。そこに勝山高校が加わって全部で13校が一緒になって児童・生徒に豊かな英語の力を身につけさせるための指導を研究しています。それぞれの学校での取組の状況は、小中高連絡協議会を開いて定期的に検討しています。同じ市内にあっても校種が違ふと、小学校や中学校を訪問するということはこれまでなかったのですが、今回の事業を通して小学校や中学校の授業参観をする機会を持てるようになりました。小学校では、子どもたちが大きな声で英語を発声している姿に、新鮮な驚きを感じました。教室では、電子黒板を活用して映像や音を交えたとても活気のある授業が展開されていました。これまで英語の指導の経験のなかった担任の先生も、大きな声で英語を使っており、その姿が子どもに元気を与えているのだと感じました。また、中学校の授業研究会に参加した際には、英語科以外の他教科の教員が英語の授業研究会に参加して、その中で積極的に意見を述べている様子に、高校との大きな違いを感じました。高校では他教科の授業研究会に参加するという機会はまずないことです。

勝山高校内での拠点事業への取組は、主として授業改善が中心となっています。年に2回公開授業を行うことになっており、英語科の教員内で授業者を決めて行っています。公開授業を目標に日頃の実践を積み重ね、公開授業を実施後には振り返りの機会を持つことで、そこで出された問題点を基にその後の授業改善の課題として捉えています。日常の中には生徒が実際に英語を使用するという場面はなかなかないので、授業だけではなく、チャンスを見つけては、実



際に英語を使用する場面を設定したいと考えています。1学期には、台湾の修学旅行団から本校への訪問がありました。その際には2年生で交流授業を企画し、英語を用いてお互いの学校生活を紹介しあう機会がもてました。こういう機会があると、生徒にとってはとてもよい動機付けになるようです。さらに2学期からはオーストリアのウイーンからの留学生が在籍するようになり、生徒達がこれまで以上に英語を使う機会が増えることを期待しています。

授業改善への取組は英語科だけでなく、他教科にも広がっています。従来から行っていた公開授業週間を充実させ、管理職が中心となって、職員全体が各教科の取組の状況を共有するための話し合いの場を持つようになりました。この会議は、授業改善検討会議のような堅苦しい名前にせず「夢創生会議」と名付けられました。この11月にも公開授業週間を設定して、国語、生物、数学、保健、芸術、地歴、英語のそれぞれの教科が公開授業を行います。私も月例カンファレンスで学んだ他校の実践例等を活用して、この取組の一端を担いたいと思っています。



シンガポール訪問報告 特別版

Reflection on an Observed Class at HAIG Girls School, SG

Primary 5 English (Composition) Class – Good Writing: Show, Don't Tell
Emotions, Senses, Thoughts, Dialogues and Actions

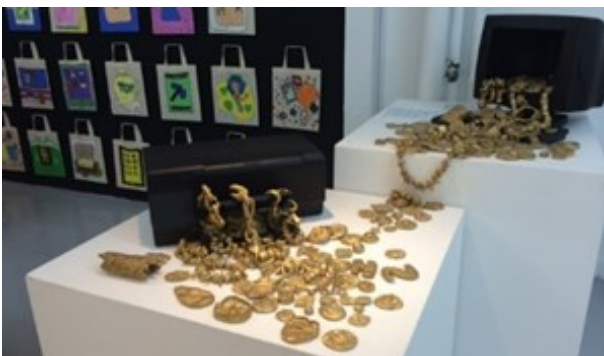
30++ students in class

Pauline Ann Mangulabnan



Singapore had been a roller coaster of funny bloopers, haze exposure, incredible experiences and unique learning for me despite my *n* previous visits to this country. One of the reasons perhaps is because I am traveling with amazing professors whose dedication for learning and education is immeasurable. The first school we visited in Singapore was the HAIG Girls Elementary School. This school is known for its art culture; in fact, the school has a mini art museum with art pieces created by elementary students' ages 8 to 11 years old. Such arts were inspired by Singapore's history, economy, etc. It was astonishing how these young girls produced art beyond their age. For example, the picture on the right portrays expenditures and gains of an economy conceptualized and concretized by a class of grade 5 students. This was their performance task for one whole year of art class.

It was not only the students who caught our attention during this visit but also the interaction



between the teachers and the students in class. Below is a summary of the comments on the English class that we observed. This document was also shared to the teachers of HAIG Girls Elementary School.

On the learning goals and lesson development:

The objectives of the class were very clear as they were explicitly presented in class. In addition to that, the flow of activities was a mixture of drills, inputs and discussions that led the students to attaining the learning objectives. It was summarize into these simple words: *Show, Don't Tell*. This composition class required the students to go beyond simple statements like 'Joy is happy.', 'She looks afraid.' etc. to describing such thoughts through actions, senses and dialogues. The attention of the students were caught by the animated teacher coupled with the timely theme of that day's lesson: *Inside Out*.

When the students saw the slide containing the five emotions from the movie, the students' facial expressions showed great anticipation on what is going to happen next. With much excitement, the girls enumerated the five major emotion characters from the movie. Using the movie to motivate the students was an appropriate and interesting choice of theme by the bubbly teacher.

From that point, the teacher developed the lesson by asking students to distinguish examples from non-examples, to identify the emotions present in the video presented, and to describe an action in a more elaborate manner. Repeatedly, the teacher reminded the students to '*show and not tell*'. Hence, for that particular period, **showing** became a habit as opposed to **telling** which then set the atmosphere to achieve the learning goals.

On students' reactions:

T: Is this telling or showing? (while paragraphs were presented on the PowerPoint slide)

S: <students were silent>

T: What emotions were portrayed?

S: They are excited!

T: Which part tells you that they are excited?

The teacher's questioning skill leads the students to dig deeper in their thoughts without spoon feeding them. She was also very patient waiting for the answer. That contributes to a lighter learning atmosphere in class.

During the first half, the teacher showed a scene from Inside Out. She then asked the students to describe what is happening. They said, *eyes widened, jaw dropped, clenched fist, body is shaking, shouted at the top of his lungs...* The teacher was expecting another answer. But the students were not able to guess it – *Banging the table*. Because the students cannot guess what the teacher was expecting for them to say, more relevant descriptions of 'Sally is angry' was squeezed out from the students. It was an interesting part of the discussion. The students were aware that the teacher was expecting another answer. So, they were really trying to get it right.

After the observation, we asked some students how they feel about their English class. They said that they like their English class because the teacher is animated and that they feel good about the class. Also, they do not find the class boring at all.

General Impressions:

It was interesting to witness how the composition class prepared the students for what they have to write through various drills ensuring that students understand what they have to write (what they have to show). Often, we experience composition classes in which students are told the

theme and would directly go to writing. However, this particular class allowed the students to experience what they had to write. Verbally, some possible errors or misconceptions were corrected through the activities prepared for the students.

During the first half of the class, the students were listening to the teacher and answering the teacher. Some of the students were not able to speak or to outspokenly join in. In some of the English classes in Japan, the teacher will ask the students to read the situation/ statement presented and share their answers or thoughts to their seatmate. This then encourages student-to-student interaction.

Such kind of interaction was achieved when the teacher asked the students to group together and have a role playing of the situations presented. The students were very engaged with the activity. Everyone participated well. Hence, although only two groups were able to present in front, the activity was successful in terms of its goals.

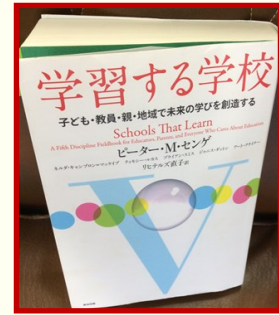
We thought that it was a very good class. The teacher led the students to a learning journey during that period. It was commendable too that the department has institutionalized the guidelines for activities in English classes like how to write an essay, what to consider during a speech, how to listen to a classmate, etc. Consistency across levels and among practices is important for students' development and growth by developing a habit and avoiding confusion due to differences in practices.



書評 学習する学校

—子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する—

ピーター・M・センゲ ネルダ・キャブロン＝マッケイブ
 ティモシー・ルカス ブライアン・スミス
 ジャニス・ダットン アート・クライナー 著
 リヒテルズ直子 訳 英治出版 2014年



昨年度、オランダへ研修に行った折に、訳者のリヒテルズ直子氏に会った。「学校はもはや教える組織でなく学ぶ組織よ。学校を学ぶ組織に変えないと現在の教育における様々な問題は解決しない。」という彼女の言葉に「学校改革って何から取りかかればよいですか」と聞いてみた。「まずはあなたの意識改革。この本を読みなさい」と一言。日本に帰ってすぐ本を購入し、880頁という辞書のような分厚さにたまげたが、なんとかようやく読破することができた。センゲの「学習する組織」と通じるところが多いが、対象を学校に限定しているの、ある意味「学習する組織」よりもイメージしやすい。まず第1章で「学習する学校」の概要が示される。第2章は「学習する組織」でもベースとなっている5つのディシプリンについて具体的に説明する。そのあとは第1部「教室」第2部「学校」第3部「コミュニティ」としてそれぞれの場面で資料やストーリーが67人の著者によって描かれている。

ベースになる考え方は、子どもたちが脱産業化時代という繋がり合う世界で生きていく生徒に役立つよう、学校をもう一度作り直すということであり、それには関わりを持つ全ての人々が自分の気づきや能力を常に高め続けるために存在するシステムとしての「学習する学校」が必要であるということである。しかし、難しいのは私がこれまでの自分自身を打破することである。リヒテルズ

ズ氏に言われた意識改革の一言がよくわかった。第1章に描かれている「産業化時代」の教育システムはまさに私が受けてきた教育である。テストのための反復学習、画一化された教育システム、教師中心の学習、できる子、できない子という仕分け・・・先生を喜ばせることや成功に繋がる得点を得ることが、学習の大きな目標であった。このままの教育では新しい時代に対応していけないことはわかるが、怖いのは私自身が産業科時代の学校が生んだ産物であること。だからこそ、イノベーションの鍵は、古い考えにとらわれた今の教師より、新しい存在としての子どものかかもしれない。「子どもとともに、学校に関わる全ての人々といっしょに生きたシステムとしての学校を創る」こと、すなわち「学校という環境をそこに関わる全ての人々にとっての学習の場にする」こと。そのための方策が具体的に書かれている。第3章以降はどこから読み始めてもどこに飛んでもよい。余白には「個人エクササイズ用」「チームエクササイズ用」「ツールキット用」「基本理念」などアイコンが示されており、チョイスしながら読むこともできる。880頁と気負いこまずに、自分が心ひかれたところから気軽に読んでみてはどうだろう。読み終えた私の本には、今、たくさんの付箋紙と書き込みが残されている。私なりに少し意識改革の一步を踏み出せた気がしている。

(小林 真由美)

Schedule

- 11/21 Sat 大阪教育大学スクールリーダー・フォーラム
- 11/23 Mon 実践研究ラウンドテーブル in 静岡
- 11/27 Fri 福井大学教育地域科学部
附属特別支援学校第14回教育研究集会
- 11/28 Sat - 29 Sun 実践研究長崎ラウンドテーブル

- 12/4 Fri 福井大学教育地域科学部
附属小学校第41回教育研究集会
- 12/6 Sun 実践研究東京ラウンドテーブル
- 12/23 Wed - 12/25 Fri 冬の集中講座 Cycle 1

【編集後記】先日、何気なく話している時、自分の口から「コミュニティ」という言葉が頻発していることに気付いた。正直、嫌いであった「コミュニティ」という用語が、いつの間にか私自身の意見を表現する言葉の一つになっていたのである。驚愕した。私の思考が変化し、それが言葉となったのかもしれない。だが、口から勝手に「コミュニティ」が出てきて、後で思考が追いついたという方がずっと実感に近い。もしかすると、言葉の意味を本当に知るのには、言葉を使う前ではなく、使った後なのかもしれない。そうすると、この編集後記も書いた後で本当の意味を知ることになるのかもしれない。だから、ひとまず終わろうと思う。何も書くことがないからではない。最後になりますが、大変お忙しい中、本ニュースレターに寄稿くださった方々に深く御礼を申し上げます。(綾城初穂)

教職大学院Newsletter No.78

2015.11.14 内報版発行

2015.11.28 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp